

八幡平と花輪盆地の鳥

1.	<u>クロツグミ</u>	歌い手ナンバーワン	2014/03/02稿
2.	<u>コムクドリ</u>	慌だしい武闘派悪ガキ	2014/03/03稿
3.	<u>ヒガラ</u>	ボサボサ頭の可愛い奴	2014/03/03稿
4.	<u>コガラ</u>	早春の森に澄んださえずり	2014/03/03稿
5.	<u>クマタカ</u>	森の王者 謎の鳥	2014/03/03稿
6.	<u>ノビタキ</u>	草原の風 夏のさきがけ	2014/03/05稿
7.	<u>ホオジロ</u>	一筆啓上仕候	2014/03/08稿
8.	<u>センダイムシクイ</u>	焼酎一杯	2014/03/08稿
9.	<u>アオゲラ</u>	外人バードウォッチャーに人気	2014/03/09稿
10.	<u>ノゴマ</u>	成田屋っ！	2014/03/12稿
11.	<u>コルリ</u>	森の宝石 シャンペンバード	2014/03/13稿
12.	<u>アオジ</u>	尾行されてる？	2014/03/14稿
13.	<u>ノジコ</u>	黄色いスマートな夏の鳥	2014/03/14稿
14.	<u>クロジ</u>	墨絵のような、影のような	2014/03/14稿
15.	<u>オオルリ</u>	幸せの青い鳥？	2014/03/30稿
16.	<u>キビタキ</u>	きーくん絶叫	2014/03/23稿
17.	<u>コサメビタキ</u>	クリクリお目々の	2014/03/24稿
18.	<u>エゾムシクイ</u>	春の声	2014/04/11稿
19.	準備中 <u>ルリビタキ</u>	るりびたきだよっ！	
20.	準備中	以下随時追加予定 --	

この文書中では、概ねSibley-Ahlquist鳥類分類(S&A)に沿った書き方をしています。古典的分類やS&Aより新しい分類に触れる場合は、その旨断りを入れながら書いています。

S&Aはもはや古いのかもしれませんが、最新の分類に準拠するには私はまだ勉強不足です。

学術的な文書ではないので、あまり堅苦しい分類には拘らないようにしてはいますが、よくある「……の仲間」という表現は、曖昧で意味不明にならないよう、注意深く避けているつもりです。

[display]

(revision 1.22)

written by © ,OOSATO,Kazzrou : kazz_atmark_kk.iij4u.or.jp

1. クロツグミ [Turdus cardis]



歌い手ナンバーワン

ゴールデンウィークの始まる頃、遠くからクロツグミ [Turdus cardis] の声が聞こえてくると、居ても立っても居られず、声の方向、近所の谷地に出掛けて暫し聞き惚れるのが、春の楽しみの一つです。

なにしろよく通る声ですから、声の方向を頼りに歩いていっても結構距離があります。他所のお宅の畑を横切ったり、挨拶したり……。

まだ雑木林の葉は繁っていないので、すぐに見つかります。

まずは、暫し歌声を堪能しましょうか。

日本三大囀りといえば、祇園、神田、そしてご当地花輪囀り。

では日本三鳴鳥は何？というところ、古来からウグイス [Cettia diphone]、オオルリ [Cyanoptila cyanomelana]、コマドリ [Erithacus akahige] ですね。この3種が日本では良く知られた声の美しい鳥とされてきました。

でも、野鳥好きなら、このクロツグミの名前を第一に挙げる人が多いのです。

たしかに、先の3種に比べれば知名度は低いですが、こいつはダントツの歌い手です。

この複雑な節回しには様々な鳥に似たフレーズも含まれますが、けっしてただの物真似ではなく、一声聞くとクロツグミと分かるオリジナリティがあります。

いったいこの子の頭の中にはどんな楽譜が埋め込まれているのでしょうか。頭をがち割って楽譜を見てみたい衝動に駆られるのは私だけでしょうか。

[クロツグミのさえずり\(MP3 約1分 鹿角市花輪荒屋敷で録音\)](#)

夏鳥です。中国南部の越冬地から、繁殖のために北日本の山地に渡ってきます。

鹿角地方でも、4月末連休のあたりに到着と同時に囀り始め、5月中旬には八幡平の中腹にも登ってきます。

あまり高地には行かず、花輪市街地に程近い高台・里山や溪谷、周辺の西山・東山、湯瀬溪谷等に多く、標高1000m未満のブナ林が上限のようです。

春の湯瀬溪谷は、雪解けの激しい瀬音で小鳥の声は掻き消されがちですが、クロツグミの声は良く通って聞こえてきます。八幡平では大沼より少し低めの場所の方がよく見られます。国道341の曾利滝周辺や、赤川橋から旧澄川温泉への道を歩いてみてもいいですね。あるいは、切留平から長滝沢や小折ヶ島沢の林道など楽しいです。

ツグミ属 [Turdus] で、アカハラ [Turdus chrysolaus] などと同じ「大型ツグミ」(*注1)と呼ばれるグループに分類されますが、それらの中では最も小型です。

真っ黒な頭・首・背中と、良く目立つ黄色のアイリングと嘴が印象的です。愛敬のある可愛い奴です。

地上をピョンピョンと飛び跳ねるホッピングで、歩きながら採餌します。藪や灌木の間をチョコマカと動き回り、ツグミ属の中でも特に地上での動きがせわしく開けた場所では留まってくれません。そういう場面では写真に撮るのも結構大変です。

でも、春の囀りの季節だけは、木のとっぺんで何時間でも居座って鳴き続けて、じつに良く目立つ鳥です。もちろん、ゆっくり見られます。

繁殖地にいる期間はやや長くて、秋の渡りの遅い鳥のようです。東京では11月に見たことがあります。

しかし、夏から秋にかけては、この鳥を見る機会が極端に減ります。囀りの季節が終わると全く目立たなくなるんですよ。

育雛ステージに入った途端に、何処で何しているか分からない謎の鳥になってしまいます。

NHK-BS放送で、イギリスの田園風景を特集した番組がよく放映されます。決まって出てくる鳥が、お腹の黄色いシジュウカラの基亜種ヨーロッパシジュウカラ(*注2)、いわゆるロビンのヨーロッパコマドリ [Erithacus rubecula]、そしてクロツグミの近縁種クロウタドリ [Turdus merula] です。

マザーグースの「六ペンスの唄」に出てくる「クロツグミ」というのは実はクロウタドリのことです。録音を聞いてみるとクロツグミよりは若干単調な囀りのようですが、それでもヨーロッパを代表する歌い手鳥とされています。

(*注1)S&A以降の分類では、従来の「小型ツグミ」と呼ばれていたグループは、ヒタキ族(亜科)の下に置かれるようになりました。したがって、「大型ツグミ」という俗称もやや陳腐なものとなっています。

(*注2)最新の研究分類では、お腹の黄色いユーラシア全域のシジュウカラと、お腹の白い極東のシジュウカラは別種とされ、Parus major はヨーロッパシジュウカラに割り当てられ、日本のシジュウカラは Parus minor と呼ばれるようになっています。

2. コムクドリ [Sturnus philippensis]



慌だしい武闘派悪ガキ

赤塚不二夫さんの描く天才バカボンの頬っぺには蚊取り線香みたいな渦巻き模様が描かれているのは皆さん良くご存じでしょう。

えっ？それがどうしたって？

とりのなんこさんの野鳥を題材にしたマンガ「とりぱん」に登場するコムクドリ [Sturnus philippensis] の頬っぺも同様の渦巻き模様なんですよ。

バカボンへのオマージュでしょうか。それがコムクドリのイメージにあまりにピッタリなので、私は笑いこけてしまいました。

名前の通り、ムクドリ科 [Sturnidae] の鳥です。でもムクドリは留鳥ですが、これは渡り鳥で、フィリピンあたりの東南アジアで越冬し、日本には東北地方や北海道に繁殖のためにやってきます。

種小名の philippensis はもちろんフィリピンに由来しています。体格はムクドリより一回り小さく、いかにも南方系らしいトロピカルな(?)色合いの鳥です。

雄なんてアロハシャツ着てるだろ！

鹿角地方では、住宅地でも里山や田園でも普通によく見られる鳥ですが、全国的には地域に偏りがあるらしくて居ない地域には全然居ません。

沢山見られるよというと、他の地方の人からは羨ましがられることがあります。

鹿角にはだいたい5月初めにやってきて、6月末には居なくなります。2ヶ月足らずで子育て完了？いやいや、じつは5月中は殆ど喧嘩ばかりしているんですよ。こいつ等ったら。

庭の木に、コムク用サイズの巣箱も用意しているのですが、最初は入居中のシジュウカラの巣箱にしきりにちょっかいを出します。小さすぎて使えないのに

ね。可哀相にシジュウカラはパニックして大騒ぎです。

次に、いよいよコムク用の巣箱を巡って、複数のペアの争奪戦が始まります。

その激しさは、取っ組み合いの喧嘩です。足で蹴り鋭い嘴で突き、同種の生物は激しい喧嘩はしないものだと思っていましたが、こいつ等の喧嘩は凄まじいです。とにかく、その時期の我が家の庭は喧騒に包まれます。

そして、やっと巣箱を確保し巣材を運び始めるのは既に5月末も近い時期になります。巣材は枯葉を拾い集めるだけで、案外粗末です。巣立ち後に開けてみたら、マツの枯葉を円形に積み上げていました。

スギゴケやシラガゴケのクッションを何層も積み上げて丁寧な丁寧な産座を作るシジュウカラに比べたら、実にイージーです。

抱卵は雌雄交互に行っているようです。

それまでペアで揃って餌台に来ていたのが交互に現れるようになって、抱卵が始まったことが分かります。その頃には天然の餌も豊富になって来ているので、餌台はそろそろ撤去します。

孵化後の給餌も雌雄共同です。孵化も早くて10日前後、そして2週間ほどで巣立ちと、鳥の中でもかなり速い子育てが終わり、一瞬巣立ち雛の姿を見たと思うと、もう家族ごと慌だしく居なくなるのです。

東京では、7月上旬には幼鳥の混じったコムクの群れを見ることができます。秋の渡りの早い鳥と思われています。時期的には符合していますね。

雛に与える餌は、青虫などの昆虫の幼虫が多いようですが、春が遅く鱗翅目の幼虫の発生が遅い年にはアシナガバチの成虫を良く捕えて来ていました。ハチの成虫の場合はすぐに雛に与えず、近くの枝で餌が弱るのを待ってから巣に運んでいきます。雌の顔はアシナガバチの返り血で真っ赤になっていました。それなりに大変なようです。

親鳥は、果物も大好物です。餌台にリンゴを置いておくと良く食べに来ます。ただ、リンゴの皮むきはあまり得意じゃなくて、丸ごとのリンゴを置くと皮むきの得意なヒヨドリが来るのを待っています。

で、ヒヨドリが食べ始めると寄ってきて睨み合い。そして体格で勝るヒヨドリを追い払ってしまいます。

気の毒なヒヨ君はコムクが食べ終わるまで、傍でじっと待っています。

ある日、庭が騒がしいので出てみると、コムクドリの巣箱にアオダイショウが迫っていました。その時、巣を守ろうとコムクの親鳥と協力して戦ってくれていたのはヒヨドリなんですね。ヒヨ君、なんて良い奴なんだ。不思議な関係です。

6月末あたり、群れを作ることがなかったコムクドリが、家の前の電線に数10羽並ぶと、渡りの準備です。程なくすっかり姿を消します。

コムクドリの姿が消えて喧騒が去ると、皮投岳の上に大きな積乱雲が立ち上がっていました。鹿角に短い夏が来ます。

大騒ぎして暴れ回って、あっという間に立ち去る、それがコムクドリ。

3. ヒガラ [Parus ater]



ボサボサ頭の可愛い奴

真冬日の続く冬の季節、吹雪の合間に雲が切れて太陽がのぞくと、時々賑やかな混群が庭にやってきます。

ピッピッとシジュウカラ [Parus major]、ニィニィとヤマガラ [Parus varius]、ジィジィとコガラ [Parus montanus]、そしてチッチッとヒガラ [Parus ater]。一瞬庭が賑わいます。

面白いことに、カラ混群というのはけっしてみな同じ行動をとっているわけではないのです。

真っ先に餌台にヒマワリの種が補充されているか確認にいくシジュウカラ。周囲を少し確認してから寄ってくるヤマガラ、広葉樹の実を探すコガラ、ヒガラは松ぼっくりを物色しています。

団体でやってきて団体で立ち去りますが、お互い干渉せず、やってることはバラバラです。

なぜ混群を形成するのかという理由には諸説があるようです。行動領域やパターンが少しづつ異なる種が一緒にいることで、外敵の発見が早くなる、という説も有力です。

混群が突然激しく騒ぎ始め、一斉に藪の陰に隠れることがあります。我が家の庭では、そういう時に上空を見上げると、ハイタカ [Accipiter nisus] やハヤブサ [Falco peregrinus] の姿があります。

鹿角、そして八幡平周辺はカラ類(シジュウカラ属 [Parus])が目立つ地域です。

一年中居るお馴染みの鳥たちなので、本州で見られる主なシジュウカラ属の鳥4種をまとめて、観察報告はあっさり「カラ類4種」で済まされたりします。

省略しないで、ちゃんと名前でご覧くださいよ。

ヒガラはこの4種の中では最も小さな鳥です。

冬には庭の松の木に来て松ぼっくりから種子を取り出して食べています。カラ4種の中では針葉樹を好む鳥です。

繁殖期は子育てのために高カロリーの餌を必要として、基本的に動物食です。

昆虫のいない冬季には種子食です。細くて強い嘴で器用に木の実の殻を割って種子を食べるようです。

スズメなどは殻が割れないので、雑穀やイネ科の植物の小さな種子を丸呑みしますし、アトリ類はペンチのような嘴で殻ごと砕いてから殻だけ吐き出しますから、両足の間に木の実を1個挟んで「コツコツコツ」と叩いて割るカラ類の食べ方はお行儀が良くて、なかなか可愛いです。

鹿角では里山、山麓のスギやアカマツの林から、八幡平では中腹のコメツガ、オオシラビソ、ゴヨウマツやモミの樹林に多くなります。

春から初夏にかけて針葉樹の森を歩くと、ツピツピツピツピと囀りが聞こえてきます。スギやアカマツ・カラムツの林の中では特に多く思われます。

シジュウカラもツピツピツピと鳴くことがありますが、ヒガラの方がより高音で速いピッチです。

でも、深い林の中ではなかなか姿は見られませんから、もうちょっと上に歩いていってみましょうか。

5月の良く晴れた日、ブナが僅かに芽吹き始めた頃、八幡平大沼レークインの前から付近のブナ・ミズナラの林をザクザクと残雪を踏んで歩いていくと、頭上の賑やかな合唱に出会うことがあります。雪の上に寝転んで天を見上げると、コガラとヒガラの混群の大群舞が見えました。芽吹き直前のブナ林は青空がすっきりと透けて見えて、ブナ・ミズナラやオオシラビソなどの梢付近を忙しく飛び回るコガラとヒガラが一度に数十羽眼に飛び込んできました。

春の雪山の至福の時です。

他のカラ類とは少し異なり、雪の上にも度々降りてきますので、じっと待っていると間近で見ることが出来ます。動かずに我慢して待っていると傍まで寄ってきてくれました。

特徴は薄茶色がかったお腹、そして、いつも寝起きのようなボサボサのヘアスタイルですね。

4. コガラ [Parus montanus]



早春の森に澄んださえずり

早春の八幡平大沼のほつりをスノーシューで歩いていきます。

休日だとスキー場のラウドスピーカーから流れてくる音楽が五月蠅いので、平日がいいです。

まだ沼は全部雪の下。雪が音を吸い込んで、沼の周囲はまったく静かです。足を止めると、時々オオシラビソの枝から雪の落ちる音、木の幹の軋む音。雪の下を微かに水の流れる音。

そんな中、ツーヒーツー、ツーヒーツーと伸びやかなコガラ [Parus montanus] の囀りが聞こえてきました。

カタカナで書くとエゾムシクイ [Phylloscopus borealoides] と同じになってしまいましたが、エゾムシクイは金属的な固く鋭い音、コガラは柔らかで澄んだ音で、一度聞くと間違えることはありません。エゾムシクイが現代風の金属ピッコロなら、コガラはバロック楽器の木製ソプラノリコーダーを思わせます。

単純だけど美しく、いつまでも聞いていたくなる歌声です。

好きな囀りの鳥名をいくつか挙げよ、と言われたら、私はコガラをベスト3に入りたいです。

大きさは、シジュウカラ、ヤマガラより小さく、ヒガラより大きいです。

シジュウカラ属 [Parus] の標高分布は、一般的に標高の低い方から、シジュウカラ、ヤマガラ、ヒガラ、コガラの順で、コガラは一番標高の高いところに棲むとされています。とは言っても、ほとんど重なり合っていて、花輪市街地に近い我が家の庭にも冬には4種ともやってきますし、八幡平大沼の周囲でもやはり4種見ることはできます。

でも、真冬には大沼周辺でも一番多く見かける鳥ですし、囀りの季節には低地には少なくなるので、やっぱり山に登って楽しむ鳥ですね。

そうです、種小名も *montanus* ですから。

針葉樹を好むヒガラと対照的に、コガラは広葉樹を好むようです。

冬に庭の餌台にヒマワリの種を置いておくとせっせと食べに来るのはシジュウカラとヤマガラで、ヒガラとコガラは餌台には来ません。ヒガラは松の木で松ぼっくりをつついていきます。

そして、コガラはカエデの実やウツギの実などを食べています。

カラ類の多くは樹洞に巣を作ります。多くはアカゲラなどの作った洞を利用します。

この地のカラ類の多さは、キツツキの多さとも関連しています。

コガラも基本的に樹洞借用型でキツツキなどの穴を利用しますが、自分で穴を開けることもあるのです。

少なくとも、完全新築は無理な場合でもリフォーム程度はやっているようです。

この小さな嘴で意外に力強い大工さんです。

ボサボサ寝癖頭のヒガラとは違い、コガラはポマードで固めたオールバック？それともビロード生地のベレー帽をかぶったように見えます。

なかなかお洒落です。

春のブナ林では大木の梢付近にすることが多く、見上げてばかりいると首が疲れます。

そんなときは、雪の上に仰向けに寝転がってしまいましょう。忙しく飛び回るコガラの姿と、美しい囀りを堪能できますよ。

5. クマタカ [Spizaetus nipalensis]



森の王者 謎の鳥

谷沿いの林道を歩いていると、尾根の上に大きな鳥が悠然と現れました。僅かな上昇気流を捕えてソアリングしながらゆったりとこちらに向かってきます。

双眼鏡の視界に入ると、美しい鷹斑を纏ったクマタカ [Spizaetus nipalensis] の成鳥でした。写真を撮るのも忘れて、とにかく1秒でも長く目に焼き付けておきたいと、見蕩れてしまうのです。

クマタカは森の生態系の頂点に立つ生物です。深い森の中で生活するため、その生態は意外に知られていません。まだまだ研究者の興味を惹く鳥のようです。

鷹の中でも特に美しい羽を持ち、その尾羽根は古くは矢羽根の材料として珍重されました。

東北地方(蝦夷地)の領主・豪族から、朝廷や幕府への献上品でした。クマタカより一回り大柄のイヌワシ [Aquila chrysaetos] は羽根の質が劣るために、イヌ(一段劣るもの)の名を冠されたとされています。

オオタカ [Accipiter gentilis] などのハイタカ属 [Accipiter] と同じく、幅広で短めの翼を持ちます。これは長距離巡航ではなく森の中での俊敏な旋回性能を高め、空中戦での戦闘能力を重視した体型です。

ワシタカ類の武器である脚の太さ長さは、より大型のイヌワシと同等と言われています。

空中戦では鳥を捕らまえ、または急降下してはノウサギ、キツネ、タヌキなどの地上の獲物を狙います。いわば、対空・対地の攻撃能力を兼ね備えた重量級の戦闘爆撃機です。

森の小動物や小鳥などを捕食する小型～中型の猛禽類、例えばハイタカ [Accipiter nisus] やハヤブサ [Falco peregrinus] にとってさえ、クマタカは恐ろしい天敵のようです。

クマタカが森の上空を飛んでいると、いきなりスクランブル発進のようにハヤブサやハイタカのペアが飛び出してきてモビング(疑似攻撃)を加えるのを何度か目撃しました。

それは谷筋の急斜面の上空、2羽のハヤブサがクマタカ目がけて上空から猛スピードで急降下してきました。ハヤブサの武器は鳥類最速のスピードを活かした体当たり、小さな鳥ならこの一撃で失神するか骨折で行動不能になります。

しかし、クマタカはハヤブサが接近してきた瞬間に姿勢を反転して脚をハヤブサの方に向けます。ハヤブサと云えどもクマタカのヘビー級のカウンター・キックを受けたらひとたまりもありませんから、ギリギリで方向転換して再度上昇、また急降下攻撃を繰り返します。

たぶん、ハヤブサの巣がその近くにはあったのでしょう。巣の雛からクマタカの気を逸らすためにハヤブサ夫婦は必死でクマタカに立ち向かっていました。

その攻防が10分以上も繰り返されて、やっとクマタカは一つ先の尾根のアカマツの木に停まりました。ハヤブサ必死の防御戦はなんとか成功したようでした。

深い森に棲む鳥のため、なかなか目にすることはないと思われがちですが、飛翔姿を遠くから見るだけなら、結構機会はあります。高倍率スコープで遠い山の稜線を飛んでいる姿を見て同定する、というレベルなら、ということです。

ただ、ある程度近距離で観察し、その生態の片鱗を知るためには、忍耐、行動力に運も必要かもしれません。私も、まださっぱり分からないことばかりです。

そんな鳥です。なにしろ、謎の鳥ですから。

花輪の市街地から、皮投岳～五ノ宮岳の稜線の上空を大きな翼を拡げて飛ぶ鳥をよく目にします。ほとんどがトビかノスリなのですが、望遠鏡を向けてよく見ると「おおっ！クマタカ」ということも度々あります。

反対方向の水晶山や三の岳の方に見られることもあります。

西山に見られるものと東山に見られるものは、おそらく別個体でしょう。

八幡平では、菰ノ森北面から長滝沢源頭や大沼外輪山の赤川側など、北面の急斜面の樹林帯で見かけました。でも似たような環境の山毛森の周囲では見たことがありません。アスピーテラインとスキー場のためでしょうか？

観光道路を通しスキー場開発をしてホテルを建設して、「さあ、美しい自然を見にいらっしやい」って？そんなに人間の都合ばかりでことは運びません。

クマタカは、そういう人間の気配のするものは、あまり好きじゃないみたいですね。

6. ノビタキ [*Saxicola maura*]



草原の風 夏のさがけ

4月中旬、気温が氷点下になって鹿角に遅い雪が積もった日のことです。

米代川に架かる稲村橋の上から、小鳥の小群が見えました。川原に降りてみるとノビタキ [*Saxicola maura*] でした。夏の花輪の祭典の時には、大きなかがり火を囲んで「さんさ」が行われる、あの場所です。

柳の枝に止まって、丸々と羽毛を膨らまして寒さに耐えています。ちょ、ちょっと、のび太くん、来るのが早すぎたんじゃないの？

バード・ウォッチャーたちは、この可愛らしいノビタキに愛情を込めて、「のび太くん」などと縮めて呼びます。えっ？縮まってない？逆に長くなってるし……ま、いいじゃないですか。可愛いし。

ちなみにドラえもんとは関係がありません。伸びた木でも、野火焚きでも、のび太きでもありません。

野鶇(野原のヒタキ)の意味です。

和名はヒタキですが、ルリビタキ [*Tarsiger cyanurus*] やジョウビタキ [*Phoenicurus aureus*] と同様、すらりと伸びた脚からも分かるように、古典的分類ではヒタキ科ではなくツグミ科でした。強力な脚力を持ち、地上で採餌する、従来は「小型ツグミ」と呼ばれていたグループです。

英名では、主に体型と行動様式から Flycatcher と Chat が呼び分けられています。和名は「ヒッヒッ」という地鳴きの特徴からどちらもヒタキと名付けられているものが多いのです。

S&A(Sibley-Ahlquist鳥類分類)で、ヒタキ科とツグミ科が統合された時に、遺伝子的には小型ツグミは古典的分類のヒタキに近いとされ、ノビタキ族としてツグミ亜科ではなくヒタキ亜科の下にヒタキ族と並べて置かれました。

ノビタキ族には、英名で Chat や Robin と呼ばれているものの大部分と、Flycatcher と呼ばれるものの一部(キビタキ属)などが入ります。ヒタキ族には Flycatcher の残りの大部分が入ります。

さらに、近年の分類では、ヒタキ亜科とツグミ亜科が再び科に昇格したため、ノビタキ族はノビタキ亜科としているものが多くなっています。

日本には夏にやってきて、東北地方では高原で、北海道では平原で繁殖します。

森林や藪ではなく、草原、牧場、川原や田畑など開けた場所を好む鳥です。明るい草原や牧野の柵などの先に、ちょっと寂しげにポツンとに止まっています。

春の渡りの時期には、川原などでよく見かけます。秋の渡りの時期には田圃の畔の杭などに停まっている姿が目撃されます。

春の渡りの早い、さきがけの鳥です。ノビタキを見てから1週間～10日ほど経つと、キビタキ [*Ficedula narcissina*]、メボソムシクイ属 [*Phylloscopus*]、オオルリ [*Cyanoptila cyanomelana*] などなど、夏鳥がいっせいにやってくるのです。

稲村橋に姿を見せたのび太くんは、さらに山の繁殖地へと登っていきます。花輪盆地の周囲の山にはかつて多くの放牧地や牧草地、そして茅葺き屋根の茅を刈るための入会地がありました。

三倉山から西へ延びる大きな尾根、花輪スキー場の裏側にあたる黒沢川側の南向き斜面など、かつては一面のカヤトの原でした。あるいは五ノ宮岳の登山道の途中にも萱場の名前だけが残っています。今はどちらも植林されて深い森になっています。

かつての記憶だとそのような場所でもノビタキを見たのですが、今は見かけません。放牧地や萱場が放棄・転換され森林が深くなったのが原因かもしれません。

最近ではこの地方では、八幡平など標高1000m以上の高層湿原が主な繁殖地になっているようです。

八幡平の頂上の喧噪を避けて、長沼・草の湯方面に下っていく草原では、ゆっくり、静かに観察できます。

いつも、草原を吹き渡る風を思い出させてくれる鳥です。

7. ホオジロ [Emberiza cioides]



一筆啓上仕候

初夏、樹々の葉が茂り始めて、なかなか鳥が見つらくなってきた頃、ひょっこり目の前に現れて目を楽しませてくれる鳥。

また初冬、雪が降りしきり鳥影もない林を抜けて伐採跡に出たとき、林縁でチッと鳴いて姿を見せてくれる鳥。

なぜかホオジロ [Emberiza cioides] にはそんなイメージがあります。

一筆啓上という特徴的な聞きなしが有名です。日本全国どこにでもほぼ一年中居るポピュラーな鳥です。

ホオジロ属の鳥は、漂鳥や渡り鳥など季節移動するものが多い中で、ホオジロは留鳥で季節を通してほぼ同じ場所に留まっています。

有名なわりには姿を知らない人が意外と多いようです。赤茶色の体に黒斑に隈取られた顔というのがスズメとにているためでしょうか？

よく見るとスマートな姿の良い鳥です。

ホオジロ属 [Emberiza] は似たような地味な鳥が多くて観察者泣かせでもあります。

雄雌の姿は良く似ていますが、顔の隈取りの色が雄は濃い黒雌はそれよりやや薄い焦げ茶色なので区別できます。

関東地方ではホオジロは2月から囀り始めることもありますが、雪国では遅くて夏鳥が勢ぞろいした頃になります。

上の写真は八幡平大沼の遊歩道脇で撮ったものです。6月下旬のレンゲツツジが満開の季節、イヌツゲの先端に停まって囀りの真っ最中でした。

梅雨の合間のこの日は人も少なく、この気持ちのよい場所で長時間囀ってい

ました。

「一筆啓上」とは言うものの、囀りの季節の雄は木の梢の一番高いところをソングポストにして、延々と鳴き続けます。100筆いや200筆ぐらい一気に啓上することはザラにあります。

鹿角では街の傍の田畑や川原から、1000mを越える山の上まで広く見られます。林縁、つまり森林と畑や草原の境目付近を好む鳥です。

群れは作らずいつも分散しています。

ホオジロと間違いやすい良く似たカシラダカは、春秋の渡りの時に大きな群れで現れるのと対照的です。

ホオジロ属の鳥たちは、どれも地味ですが美しい囀りをします。逆に地鳴きはほとんど「チッ！」と同じで識別の難しいグループです。その中で、ホオジロだけは「チチッ！」と二声連続して鳴いてくれるので区別することができます。

尾羽根の両脇に白い羽が目立つのは、唯一クロジを除くホオジロ属共通の特徴です。

オオヨシキリ [*Acrocephalus orientalis*] と並んで、よくカッコウ [*Cuculus canorus*] の托卵対象とされる鳥としても知られています。

鹿角はカッコウは多く来ますが、オオヨシキリは低地にしか居ないので、山ではホオジロが集中的に狙われそうです。

気の毒です。

[[display](#)]

revision 1.3 2014/04/11 (2014/03/08初稿)

written by © 2014,OOSATO,Kazzrou : kazz_atmark_kk.iij4u.or.jp

8. センダイムシクイ [Phylloscopus coronatus]



焼酎一杯

今は廃鉱となって久しい尾去沢鉱山。私たちが子供の頃は花輪の街から見上げる尾去沢の山は赤茶けた禿山でしたが、現在では美しい緑に覆われてきました。

その山の裏の斜面に貼り付くように田郡という廃村があります。今は家もなく、昔日の思い出を偲びながら山道を登っていきます。

ここに観音堂という古い庵の跡があります。友人の住職に誘われ、草刈りと先祖供養のために、6月の第1日曜日ここを訪ねるのが、ここ数年の年1回の行事になりました。

草刈り鎌を振りながら急坂を登ると、すぐに汗ばんできます。道を塞いでいる倒木は鋸で片付けます。

山道の両側に、古い家の礎石だけが残っています。幼時の微かな記憶を辿ります。

路傍を埋め尽くすマイヅルソウの群落に癒されます。

まさに夏鳥の囀りの季節です。ウグイス、キビタキ、オオルリ、遠くからボー、ボーとツツドリ、そして、この年は特にセンダイムシクイ [Phylloscopus coronatus] が多い年でした。チョチョチョギーと鳴き続けていました。

日本に夏鳥としてやってくる代表的なメボソムシクイ属 [Phylloscopus] は、メボソムシクイ [Phylloscopus borealis]、エゾムシクイ [Phylloscopus borealoides] と、このセンダイムシクイの3種です。外見はどれも良く似ています。

センダイムシクイの外見上の特徴は、黄色い頭中央線です。種小名の

coronatus、英名のEastern Crowned-Warblerは、いずれもこの特徴的な頭中央線に由来しています。

頭中央線が見えれば識別は容易なのですが、下から見上げているときはやっぱり悩めます。

鳴き声は、囀り地鳴きともそれぞれ特徴的なので、鳴いてくれさえすれば簡単ですが。

「焼酎一杯ぐいー」とか「鶴千代ぎみ〜」と言う聞きなしが有名な特徴的な囀りです。

地鳴きは「フィ」という柔らかい音で、「チッ」と硬い音のエゾムシクイ、「デュイ」と太く濁ったメボソムシクイと簡単に区別できます。

繁殖地の標高分布もかなり明確で、里山のセンダイ、広葉樹林帯のエゾ、亜高山針葉樹林帯のメボソと別れます。

春秋の渡りの時期も繁殖地の標高に応じてずれています。早いのがセンダイ、続いてエゾ、遅いのがメボソとなります。

じつは、メボソムシクイ属は難解なグループです。地味で目立たなくて、生態は藪の中で、地域的な微妙な差があって、渡りの分布が複雑。

ウグイス科に属するとされていましたが、最近の研究ではメボソムシクイ科を独立させる学説が出てきたりと、わけ分からん程変わってきています。

その中では、センダイムシクイは分かりやすい鳥です。

すっきりした眉斑と過眼線。姿の良い大好きな鳥です。

[[display](#)]

revision 1.3 2014/04/16 (2014/03/08初稿)

written by © 2014,OOSATO,Kazzrou : kazz_atmark_kk.iij4u.or.jp

9. アオゲラ [Picus awokera]



外人バードウォッチャーに人気

東京の葛西臨海公園で鳥見をしていたとき、カナダから来たというバードウォッチャーと出会ったことがありました。

英会話は苦手なので、私のカタコトの怪しい英語は通じているのやらないのやら。

でも、鳥仲間同士。鳥の名前だけは全世界共通のラテン語の学名で通じます。Tringa brevipes [キアシシギ] やTringa cinerea [ソリハシシギ] を教えてあげると、彼は大喜びでした。

たしかに、私たちにとっては見飽きた普通種ですが、北米では貴重種。私たちがメリケンキアシシギ [Tringa incana] やアメリカオオハシシギ [Limnodromus griseus] を見て狂喜乱舞するようなものでしょうか。

彼は、「びくゆす・あうおけーら」も見たいんだよ、という意味のことも言っていました。

アオゲラ [Picus awokera] も日本だけに棲息する固有種なので、外人ウォッチャーが是非日本で見て帰りたい鳥のようです。

たまに、アオゲラなのに「青くないじゃん」と言う人がいます。たしかに緑色。

古語では「あを」は青よりも緑色を表します。現代でも青葉とか青信号とかは緑色。

青色は「るり」ですね。

日本の野鳥観察の黎明期、日本野鳥の会の発起人名簿には、中西悟堂、北原白秋、金田一春彦、窪田空穂、柳田國男などなど、錚々たる文人・碩学が名を連ねていました。今、私たちの使っている野鳥の種名はそのような方々の努力に拠るものです。

古典に通じた先生方が命名したので、アオゲラ、アオバト、オオルリ、ルリビタキ、などと違和感なく使い分けられたのでしょう。

鹿角では、低地の花輪市街地から八幡平のブナ帯上部まで、広い範囲で見られます。

「ケッ、ケッ」とか「キョーン」など、良く通る声で鳴きます。

当地で見られる他のキツツキ類は皆アカゲラ属 [Dendrocopos] ですので、ちょっと雰囲気違います。

ヒヨドリのような波状飛行をします。そして、何を間違ったか？！時々ヒヨドリと一緒に行動したりしています。

数羽のヒヨドリの群れが飛んで来て、庭のサクラの木に停まりました。

一羽だけ幹に縦に停まっている奴がいたので、「キツツキの真似するお茶目なヒヨドリめ！」と、よく見たらアオゲラだったこともあります。

お腹がぷっくり膨れた愛敬のある体型です。

私はウソ、ノスリ、そしてアオゲラを「メタボ三兄弟」と秘かに呼ばせてもらっています。

八幡平では、大沼ビジターセンターの駐車場で車を降りて周囲を見回すと、よく近くのブナの木でお出迎えしてくれる鳥です。

レークインの裏山に登っていくと、アカゲラよりも少し長く良く響く声が聞こえてきます。

[[display](#)]

revision 1.4 2014/04/11 (2014/03/09初稿)

written by © 2014,OOSATO,Kazzrou : kazz_atmark_kk.iij4u.or.jp

10. ノゴマ [*Luscinia calliope*]



成田屋っ！

夏鳥も勢ぞろいして春の渡りも終わりと思われた頃のある朝、庭に珍しい訪問者がありました。

伸び始めた雑草の間をぴょんぴょん飛び跳ねている2羽の鳥。な、なんと！ノゴマ [*Luscinia calliope*] の雄雌じゃありませんか。

ノゴマは東南アジアの越冬地から渡ってきて北海道で繁殖します。当地では旅鳥ですので見られるのは一瞬のはず。この貴重なお客様のために庭の草取りは一時中止して見守ります。

昼になっても、夕方になっても、広くもない我が家の庭にずっと居ます。庭のあちこち歩き回り、縁の下にまで入っていくし……、なにやらお寛ぎのご様子。よっぽど、ここがお気に召したようで。

まあ、翌日には居なくなるだろうと、取り敢えず写真だけはしっかり撮らして頂きました。

でも、翌日も翌々日も、まだ居ます。ええっ？まさか？いやいやいや……。そんなことは……ない、ない、ない。

2羽の行動、距離感からして番のように見えます。そして、次第に行動範囲を広げて隣家の庭にまで出張しています。渡り途中の休憩なら、リスクを冒してまで行動半径は広げないんじゃないだろうか。

時々、カエデの木の枝に、雄雌が1m程の距離で並んでいます。繁殖期以外は藪の中の地面をすばしこく動き回って、あまりゆっくり姿は見せないはず。

本州での繁殖例というのは、過去に早池峰山での一例だけです。もしかして、もしかして、これが2例目に……。と淡い期待にドキドキしました。

結局、1週間滞在して、一言の挨拶もなく(笑)いなくなりました。

津軽海峡を渡ってウトナイ湖あたりに行ったのでしょうか。

ノゴマの春の渡りの期間はかなり長いのでしょうか。4月中旬に尾去沢での目撃もあり、5月中旬に湯瀬溪谷で見たこともあり、そして6月も近くなって我が家でと、鹿角を通過する期間は50日程の長期に渡ります。

普通は、春は舳倉島～飛島～竜飛などの日本海ルートで一気に北海道へ向かうとされていて、関東や関西での目撃例はほとんど秋の渡りに集中しているようなのです。

しかし、鹿角では春の渡りに多く見られる気がします。ということは、日本海ルート他に、本州の脊梁山脈ルートがあるのかもしれませんが。勇払原野に向かうには、竜飛よりも大間を経由した方が早いために内陸に進路を取るのかもしれませんが。

そのような記録はあまり見たことがないので、興味を惹かれる事象です。

仙北から八幡平を越えて？それとも、北上川流域から七時雨山～野沢欠峠～褒部という往古の坂上田村麻呂の蝦夷遠征コース？想像だけは勝手に膨らみます。

分類的にはノゴマ属 [Luscinia] で同じ属にコルリ [Luscinia cyane] が含まれます。また、コマドリ属 [Erithacus] とも近縁です。(*1)

長い足、高い腰、背筋のスッキリと伸びた立ち姿はコルリと共通です。
和名はもちろん野の駒鳥の意味です。

ファッションモデルのようにクールでスタイリッシュなコルリに対して、ノゴマは舞台俳優ともいべき「濃い」キャラクターです。なにしろ、顔の派手な隈取りが印象的です。

地味な雌でさえバフ色の地にくっきりと白い4本の隈取りがあります。雄ときたら、白黒の隈取りに朱色の喉元と團十郎の暫ばりの派手さです。

よっ！成田屋一っ！

種小名の Calliope はギリシャ神話に由来します。ゼウスの娘、パルナッソス山に住まうミューゼの一人、叙事詩を美声で歌い上げる女神カリオペです。
その名の通り美しい囀りということですが、滞在中には聞けませんでした。

北海道に行って歌声を聞いてみたい鳥の一つです。

(*1)最新(2010年以降)の分類では、「旧コマドリ属 Erithacus の大半と旧ノゴマ属 Luscinia を、コマドリ属 Larvivora サヨナキドリ属 Luscinia ノゴマ属 Calliope に再編し、オリヒタキ属 Hodgsonius をサヨナキドリ属に統合した。」([Wikipedia ヒタキ科](#)より引用) となっています。

その結果、ノゴマは Calliope calliope に、コルリは Larvivora cyane になりました。

11. コルリ [Luscinia cyane]



森の宝石 シャンペンバード

雪解け水の迸る瀬音を聞きながら、森の谷沿いの山道を歩いていきます。木漏れ日の強い明暗がちらちらと揺れる森の中は、小鳥の動く気配を消してしまいがちですが、足元の谷からはキセキレイが、頭上からはヒガラの囀りが楽しませてくれます。

大きく曲がって苔むしたミズナラの大木の幹に、一筋の光が差し込んでいました。そこにスポットライトを浴びたように立つコルリ [Luscinia cyane] の姿がありました。

一瞬の光景でした。でも、この森の宝石はすぐに飛び立って灌木の藪に隠れてしまいます。

それは気のせいなのでしょうか。コルリを見る場所はいつもそこだけ木漏れ日が当たっていて、森の中にひっそりと用意されたステージに妖精が立っているかのようです。そして、こちらに気がついて、すっとポーズをとった後消え去るのです。コルリとの出会いは、いつもそうです。

シャンペンバードという言葉があるそうです。

「姿を見た日は、とっておきのシャンペンを開けて今日の幸運に乾杯しよう！」と言う鳥のこと。私にとって、コルリはまさにシャンペンバードです。

「藪から出てきて囀っているときは、結構ゆっくり見られますよ」と言ってくれる人もいます。でも、残念ながらまだそういう場面に私は遭遇していません。

実際、私はコルリの写真は一度しかシャッターを押したことがありません。上の写真は、カメラを取り出すのがやっと間に合った、貴重なその1枚。

コルリの美しさ。それは瑠璃色の色合いもさることながら、なによりその姿だと

思っています。

地上採餌するノビタキ族(亜科)の特徴で、脚の長さと立ち姿のバランスがとても良いのです。フライキャッチャーのヒタキ族(亜科)は脚が貧弱ですから、立ち姿が不格好です。

「オオルリなんてダサくって格好悪くて……」とうっかり言っしまい、顰蹙を買ったことがありました。まあ、夏鳥人気ナンバーワンのオオルリ [Cyanoptila cyanomelana] に向かってそれはないよね。

姿は滅多に見れないかわりに、声はしばしば耳にします。コマドリ [Erithacus akahige] によく似ていますが、もっと抑揚があってバリエーションが豊富です。近くで聞いて、「チンチンチン…」と前奏が入れば決定的ですが、なかなか近くでは聞けません。遠く谷から風に乗って聞こえてくることは多いのですが。

夏鳥です。東南アジアや大陸南部から、北日本に渡ってきます。似ているコマドリよりも標高の低い場所が繁殖地になります。

主に落葉広葉樹林、ブナやミズナラの林の谷沿いの急傾斜地に多いような気がしています。

標高の低いところでは、湯瀬溪谷に落ち込む八森の急斜面とか、八幡平では、大沼外輪山の澄川側斜面とか、菰ノ森北面の坪沼を見下ろす斜面など。

ブナ林の残雪が少なくなつて、そろそろ山道を外して歩くのが不自由になってきた頃、谷沿いの急斜面から風に乗って特徴的な囀りが聞こえ始めてきます。

運良くその時期に出会えればよいのですが、時を逸すると既に藪の中で、目にできる難易度がグッと上がってしまいます。

春の渡りで山に登る直前は、里山にもごく短い時間滞在することがあります。我が家の傍の谷戸で見つけたことが一度だけありました。まったく偶然の出来事ですが。

家に戻って、あいにくシャンペン wasn't だったので、取り敢えず冷蔵庫のビールで乾杯したのはいうまでもありません。

さて、コルリはどこに行けば見られるか？という質問に答えられるほど出会っていません。

妖精は信じる人にだけ見えるそうですよ。幸運を祈って歩きましょう。

12. アオジ [Emberiza spodocephala]



尾行されてる？

田圃の畦道を歩くと、草の伸びた里山の作業道を歩くと、そして登山者の少ない樹林の山道を行くと、「ちっ、ちっ」と舌打ちしながら後からついてくる奴がいます。

振り向くと、誰もいない。

また歩き出すと「ちっ、ちっ」。サッと振り向くと……、いたいた！ 見つけましたよ。アオジ [Emberiza spodocephala] です。

少し先に行って振り向くと、また同じ距離にいます。ずーっと同じ間隔で付いてきてるようです。

尾行られている。間違いない。

ちなみに…

「アオジの舌打ち」とは、葛西臨海公園鳥類園チーフ、Nさんの命名です。

「アオジの尾行」とは、不肖私の命名ですw。

アオジに限ったわけではありませんが、特にアオジは尾行が好きなようです。しかも、舌打ちするので、ちょっと苛つくんですよ。

人間が通ると、落葉の下や草の根元に隠れていた虫が姿を現します。それを彼らはよく知っています。

鹿角地方ではアオジは夏に見られます。でも、東京の人はアオジを冬鳥だと思っているかもしれません。

ですから、正確には夏鳥でも冬鳥でもありません。本州のあまり広くない範囲で季節移動をする漂鳥ということになります。

夏鳥がやってくるゴールデンウィークの頃、そろそろ庭の雑草取りを始める

と、傍でチッチッが始まります。やはり、付かず離れずの距離にいます。

程なく、木の上で囀りも始まってきます。ホオジロ属 [Emberiza] の例に漏れず美声です。時々ゆったりとしたフレーズが入るテンポの穏やかな鳴き声です。

一度、庭のカエデの木に巣作りを始めたことがありましたが、ハシボソガラスに邪魔をされて中断してしまいました。

分布域は広く、市街地の近くから山のブナ林上部までいろんな場所で繁殖するようです。

八幡平大沼では、ミズバショウが咲き遊歩道の木道が見え始めた頃から気配を感じ始めますが、森が深いので姿はあまり見易いとは言えません。

個体数もう少し標高の低い場所の方が多そうです。

繁殖期は、番で分散するのであまり群れで見ることはありません。

そして秋、木々の葉が色付き始めた頃、尾去沢の水晶山等、ススキや灌木の山の斜面を歩いたとき、足元から大きな群れが飛び立ちました。若鳥の混じったアオジの群れでした。

群れで見るのはこの時期だけ。当年生まれの子供たちを連れて暖地へ移動する準備なのでしょう。

越冬地ではほとんど地面や低い灌木の中を生活の場に行っているアオジですが、東京で見ていたとき、11月の到着直後の頃だけはケヤキやクスノキの高い枝を飛び回っていたので意外な感じがしました。

それが、繁殖地では明るい開けた場所で朗々と囀っているのを見て、少し謎が解けた気がしました。

それはまだ夏の名残だったのですね。

13. ノジコ [*Emberiza sulphurata*]



黄色いスマートな夏の鳥

梅雨の合間を縫って、鹿角市内の森林公園にでかけました。小学生の時はよく遠足の目的地になった、甘露という場所です。

スギの林の中で動いている小鳥の小群が見えるのですが……なんでしょう？

まず藪蚊が寄ってきます。そして、クロメマトイが目玉に飛び込んできます。もう、鬱陶しいこと。

最初に見えた鳥はアオジ [*Emberiza spodocephala*] のようでした。でも、ちらほらクロジ [*Emberiza variabilis*] も見えます。クロジの雌とアオジは区別が難儀です。尾羽根を広げるまで確信できません。さらに、アオジよりちょっと細身で黄色味の強い鳥も現れました。もしかしてノジコ [*Emberiza sulphurata*] かもしれない？

ノジコとアオジもこれまた紛らわしいのです。

ホオジロ属 [*Emberiza*] はかなり大きなグループです。そして似たような鳥が多くて観察者泣かせでもあります。

ノジコは特別に珍しいという程ではないのですが、見る機会はあまり多くありません。しっかり確認したいのですが。

スコープを覗こうとすると、クロメマトイが目玉に…。

カメラの準備を始めると手の甲で藪蚊が今まさに刺そうとして…。

もう……、勘弁してくれー！

藪から飛び上がってきて小枝に停まります。そしてまた藪に隠れると今度は

別の場所から現れます。

どうやら、アオジ、クロジ、ノジコの3種が交互に姿を現して来るという、嬉しいような、しかし悩ましい光景が繰り広げられました。地鳴きもそっくり、姿も似ている。出てきた瞬間に即座に判別なんかできません。

なんとか、スコープの視界に捕えると、あ”あ”あ”…クロメマトイと薺蚊の邪魔が……。

撮った写真も、あとで見るとどれだか分からないものが多数あって、また悩みました。

ノジコは、北日本だけで繁殖する夏鳥です。一部は西日本で越冬し、多くは台湾やフィリピンなど極東南部で越冬します。

世界的にも狭い地域の鳥ですが、日本国内でもどこでも見られるというわけではないようです。意外にも地味な存在で、都会のバードウォッチャーの中には見たことのない人も多いようです。

アオジは低地から高地まで広い範囲に分布しますが、ノジコの標高分布はわりと狭くて、主に標高250m～600mぐらいの針葉樹と広葉樹の混じる山林でしょうか。

アオジとの外見の違いは、以下のような点があげられます。

- ・やや細身で小さいこと。
- ・黄色味が強く見えること
- ・細いアイリングはアオジより明瞭なこと
- ・成鳥は腹の縦斑が全面ではなく、両脇のみであること
- ・嘴が明るい鉛色、アオジは肉色または肉色と暗い鉛色のコンビ

種小名の *sulphurata* は硫黄の意味。やはり黄色の印象が強いことから来ていると思われます。英名は？と調べると「Yellow Bunting＝黄色いホオジロ(の仲間)」、そのまんまですね。冬に黄色い小さな鳥といえばマヒワですが、夏ならノジコかもしれません。

漢字では野鴟子と書きます。鴟(訓読シトド)はホオジロの古語です。

野鳥の和名にシトドとついているものは100種以上ありますが、そのほとんどは海外種です。明治の頃、1万種近い学名に和名を割り当てていくときに、万葉の時代に思いを寄せてシトドという言葉を選んだ方々のことを思い浮かべてしまいます。当時は博物学者と民俗学者、文学者の領域は大きくオーバーラップしていました。

囀りは、コロコロと珠を転がすような、とても美しい声です。

とてもよく通る声なので、小さな体に比して遠くまで聞こえます。声を頼りに探していくと、見つけたときにあまりに遠いので驚くことがあります。

ホオジロほど喧しくない。カシラダカほど忙しくない。アオジみたいに間延びしない。クロジほど単調ではない。

ホオジロ属中最高の唄声と評する人が多いようです。

14. クロジ [Emberiza variabilis]



墨絵のような、影のような

南北に細長い花輪盆地は四方を山に囲まれています。

北に十和田外輪山から遠く八甲田の峰々。南に広大な八幡平の山塊。東は通称東山と呼ぶ花輪の街に被い被さるような1100m級の五ノ宮岳と皮投岳。そして、西は500mを少し越える通称西山、かつて尾去沢鉦山のあった水晶山、大森山などが並びます。

初夏、その西山の麓を歩いているとき、林の中から聞き慣れない囀りが聞こえてきました。

この辺りで今の時期鳴きそうな小鳥は……、ホオジロ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、セキレイ類、コサメビタキ、アオジ、カラ類……、いろいろな鳥を思い浮かべてみますが、どれも違います。

強いて言えば歌い始めはイカルに似ていますが、終わり方が尻下がりで違います。

分っかりませ〜ん。30分待っても姿も見えません。

家に帰ってから「ことりのさえずり」サイトで調べることに暫し……ありました！ありましたよ！クロジ [Emberiza variabilis] です。

そうかそうか、クロジだったか。と、納得して後日再出動。

再び声は聞けたのですが、姿は見えません。藪蚊と闘いながら小一時間。やっと、スギ林の林床の灌木で鳴いている、影のようなクロジの雄を見つけました。

暗い林の中で黒い鳥ですから、困ったものです。

よく比較されるアオジは、繁殖期には明るい木の梢などで囀ります。

非繁殖期にアオジとクロジを見ていると、同じように地面に近い藪の中にいる
と思いきやですが、繁殖期にはかなり違うように思われました。

囀っているクロジの姿は初めて見たので、意外な発見でした。

黒い鳥というと、ハシブトガラスやハシボソガラスのカラスの濡れ羽色。艶の
ある黒光りするような色を思い浮かべてしまいます。

カラスの色を想像していて、実際にクロジの和紙に墨で描いたような渋い黒
を見ると、こんな色の鳥があったのかと驚きショックです。暗い森の中ではさら
に目立たなくなる色です。

アオジと同様、漂鳥で、鹿角では夏の繁殖期に見られる鳥です。

東京近郊では、冬は公園で夏は高尾山などで見かけますから、それほど長
い距離は移動しないようです。

大陸にも少しいるものの、ほぼ日本固有と言ってよい分布ですので、外国人
が見たがる鳥の一つです。

地鳴きは「チッ」と言うやや金属性の音で、アオジとそっくりです。アオジと区
別できるという人、できないという人、両方いますが、私は区別できない人。

全然違いが分かりません。聴力や音感は個人差が大きいので仕方ありませんね。

雄は墨を流したような黒さで他に類似の鳥がないので一目瞭然なのですが、
雌はアオジととてもよく似ています。停まっている状態の羽衣ではまず区別
が付きません。

ホオジロ属 [Emberiza] の多くの鳥は、尾羽根の両脇に白い羽があります。と
ころがクロジだけはその白い羽がありません。これがクロジ雌とアオジの唯一と
いってよい確定的な識別点です。

ですから、分からないときは尾羽根を広げて飛び立ってくれるまで、じっと待
ち続けることになります。

アオジだと思って見ていたら、飛び立った瞬間に、あっクロジ雌だ！写真
撮っておくんだったよー。なんてことが何度かありました。

そうです。私はクロジ雌の写真は一枚も持っていないのです。

「飛び去りて尾羽に知るや黒しとど（和）」一句捻っている場合か(苦笑)

アオジよりも個体数はかなり少ないような気がします。加えて藪の中を好み目
立たない色ですから、見つけるとちょっと嬉しい鳥です。

一般的に鳥類の雄は雌にアピールするために派手な色合いの羽衣を持ち
ますが、クロジの雄はことさら目立たない衣を着ているように見えます

でも、鳥類の色覚は人間には見えない波長の光、紫外線や赤外線も識別し
ます。だからクロジの世界では全く違う色に見えるのかもしれませんが。

クロジの雌に、「ねえねえ、キミのカレシはどんな色なの？」って聞いてみた
いです。

15. オオルリ [*Cyanoptila cyanomelana*]



幸せの青い鳥？

八幡平の3合目相当、標高650～700m付近に私の好きな山道があります。

平坦に開けた沢がそこだけ喉のように狭まって、広葉樹の森が兩岸に迫っている場所です。その谷底に沿って緩やかに辿って行きます。所々斜面が崩れて露出した土壁も見えます。上流はブナ原生林の天然の貯水池なので、季節を問わず水量はあまり変わりません。

いつも決まって同じ場所で、オオルリ [*Cyanoptila cyanomelana*] の囀りが、ブナの高い梢の方から聞こえてきます。

なぜかここで聞くオオルリはとても美しく聞こえるのです。

沢の底なので、見上げてもなかなか姿は見えません。ま、見えたとしてもお腹ですから。谷川のせせらぎとオオルリを楽しみながら歩くことにしましょう。

よく、オオルリは幸せの青い鳥と呼ばれます。

でも、モーリス・メーテルリンクの童話劇の青い鳥は、じつはヨーロッパ産のキジバトの近縁種コキジバト [*Streptopelia turtur*] なのですよ。

と聞いてがっかり拍子抜けする人もいます。

だって考えてみてください。幸せの青い鳥は遠い遠い夢の国じゃなくて、結局、チルチルとミチルのいちばん身近なところにいた訳じゃないですか。

実際には、オオルリは極東・東南アジア限定の鳥で、しかも一属一種。ヨーロッパに類似種はいません。

まあ、日本ではバードウォッチャーに大人気の鳥で、見た人を幸せな気持ちにさせてくれますから、そういう意味で幸せの鳥ではあります。

夏鳥で、鹿角にはほぼ5月の声とともにやってきます。

長年日光に通っている松田道雄さんによると、キビタキより1週間程早くやってくる鳥だとされていますが、どうも鹿角の山ではそうでもありません。むしろキビタキより少し遅れて山に登るように感じています。

これは、日光と八幡平の、ちょっと興味深い違いです。

到着直後は市街地の近くや里山でもよく見られます。その時期なら、雄も低木や地面に近い位置にいますので、背中の美しい瑠璃色を堪能できます。

ところが、程なく囀りが始まる時期になると、雄を見かけるのは高木のでっぺんのソングポストです。遠いのです。お腹しか見えないのです。

地味な雌はといえば藪の中なので、これまたさっぱり見えません。

オオルリの雄が木の上部、雌が下藪という生活環境の違いには、明確な理由がある、という調査・研究結果を読んだ記憶があります。

繁殖期に雛に確実に給餌するために、各々異なる場所から異なる種類の餌を獲るということらしいです。

ヒタキ族なので基本は空中・樹上採餌の鳥です。しかし、雌は地面に近い部分での採餌もするようです。脚は貧弱で短いので、地上での行動はあまり得意じゃなさそうな鳥なのに…、母親は苦勞しますね。

下から見上げるオオルリの雄は、逆光で空に溶け込んでしまいますし、曇りの日は燻んだ黒っぽい色になってしまいます。

「ほら、あれがオオルリですよ」と教えてあげても、なんだかさえない色の鳥だなあ…としか見えないこともあります。

八幡平大沼の周囲では、多いときには数カ所で囀っているオオルリがいるのですが、残念ながらだいたい見上げる角度になってしまうのです。

美しい囀りです。でも、どうも歌い方には2種類あるような気がしています。

いかにもオオルリと言う感じの、ややゆったりと複雑で長いフレーズを繰り返すときは、うっとり聞き惚れさせてくれる美声なのですが。

それとは別に、単純な、やや面白みに欠ける短いフレーズの時もあります。

その違いは何故なのでしょう？と疑問が湧きます。

オオルリは溪流の鳥といわれます。

思い返してみると、流れの激しい溪谷沿いで聞くオオルリは複雑に囀っているような気がします。逆に、そのような場所以外では単純でつまらない囀りなのです。

どうやら、瀬音に抗して存在を強く主張するとき、いわゆるオオルリの声と言う長い複雑な囀りをするようだと、言う仮説を立てている人もいます。

そうすると、瑠璃色に輝く姿を見られて、且つ同時に囀りも楽しめる場所って何処になるの？

結構、難しいです。大沼周辺はどちらもイマイチなんですよ。

私のお薦めは、取り敢えず雪解け水が渦巻く季節の湯瀬溪谷。囀りも綺麗ですし、運が良ければ溪谷の斜面を見下ろす角度で姿を見られます。

16. キビタキ [Ficedula narcissina]



きーくん絶叫

来ました来ました。朝から元気に鳴いています。5月も下旬になってキビタキ [Ficedula narcissina] の囀りはいよいよ佳境に入ってきました。

家の裏の小さな祠の杉木立の中から聞こえてきます。今日は「ソフトクリーム」連呼パターンを延々と続けています。

もう2時間も連続して鳴き続けですよ。時々声が裏返って「ケキョ…」って、きーくんそれ違うでしょ。違う人の声でしょ(笑)。

きーくん絶叫(MP3 約1分 鹿角市花輪荒屋敷で録音)

これがまあ、キビタキの典型的な囀り(絶叫系)なのですが、もっと地味なあっさりした囀りもよく聞きます。

どちらかというと、アッサリ系きーくんの方が多いかもかもしれません。この違いは、環境に拠るものか、年齢等なのか、繁殖期のステージの違いなのか、単なる個体差なのか？棲息密度によって変わると言う説もあり、よく分かりません。

繁殖期の雄は、かなり強くナワバリを主張します。

雄同士の争いの時は、ちょっと想像もつかない声も出します。森の中から「ビリビリ…」というセミの羽音のような音が聞こえてきたら、キビタキの闘いの声かもしれません。

これが羽音ではなくて声なのですから、驚きです、

学名の種小名は narcissina で、英名も Narcissus Flycatcher と共通です。

水仙の黄色に由来するのでしょうか、一心不乱に自己陶醉のように鳴き続ける様子は、水仙に姿を変えられてしまったギリシア神話の美青年ナルキッソスも連想させます。

雄は鮮やかな黄色と黒の鳥です。

基本的に空中もしくは樹上採餌ですから、昆虫類が飛び始めないとやってきません。オオルリ [*Cyanoptila cyanomelana*] やコサメビタキ [*Muscicapa dauurica*] などとほぼ同時に姿を見させてくれます。

空中に飛び出して飛んでいる昆虫などを捕まえるのが上手です。フライングキャッチです。

キビタキ属 [*Ficedula*] の鳥は、世界中におよそ30種程ありますが、英名は全て Flycatcher が付きます。しかし、Flycatcherは、旧ツグミ科と統合されたヒタキ科のヒタキ亜科からさらにノビタキ亜科を分離した最近のヒタキ亜科の総称でもあって……、ああ、ややこしい。

東南アジアからやってくる夏鳥で、鹿角では4～5月の連休頃平地に来て、ブナの芽吹きに先駆けるように山にいきます。5月上旬には花輪近郊の東山や湯瀬溪谷で、中旬頃には八幡平大沼周辺でも姿を見かけるようになります。

森の中では中層を好むと言われていて、実際わりと見やすい場所にいてくれますが、晴れた日には、かなり上層に見かけることもあります。

おそらく、羽虫の飛んでいる高さによるんじゃないかと、私は思っています。

空中で虫を捕えたあと同じ枝に戻る習性は、多くのヒタキ族と同じです。次々と別の枝に移動してしまうムシクイ類に比べて観察は楽です。

普通は森の中の中低木で見かけることの多い鳥で、木漏れ日のチラチラする森の中では意外にも保護色になります。

藪蚊に刺されながらの観察になることもしばしばです。その時は蚊が私の血を吸い、キビタキがその蚊を食べるという食物連鎖で、「人間が生態系の最下層かよ！」状態になってしまいます。

でも、まだ雪の残るブナ林の芽吹きの時期は別で、蚊に悩まされることもありませんし、青空にくっきりと抜けた黄色のコントラストが美しいです。

上の写真は、5月中旬の大沼外輪山で。綺麗な色で人気のキビタキですが、特にこの時期のこのアングルは格別です。

木々が繁り、藪が深くなり、囀りも聞かなくなると、目立たなくなります。

でも、忘れないでください。子育て中ですから静かに見てください。

抱卵と育雛は主に雌の担当らしいですが、ウグイス科 [*Sylviidae*] の多くの鳥のように交尾さえ済めば後は知らん顔ではなくて、雄も付き添っています。

雄がどの程度育雛に関わっているのかはよく分かりません。少なくともナワバリ維持はやっているようです。

林道を草刈り車が通り過ぎた後、飛び出した虫を目当てに雌のキビタキが現れました。見ると少し上の枝にはやや若い羽衣の雄もいて、キリリとした姿で周囲を警戒していました。その横には嘴が黄色で胸が幼羽の羽毛で覆われた巣立ち雛が口を開けて餌をねだっていました。

7～8月頃に見かける、こんな一家お揃いの姿も、微笑ましいです。

17. コサメビタキ [Muscicapa dauurica]



クリクリお目々の

アスピーテラインの喧噪を避けて荒れた林道に入っていきます。

雪解け直後の林道は路肩が緩んでいて危険です。無理せずに車はさっさと降りて歩き始めると、キクザキイチリンソウやカタクリ、ミヤマエンレイソウ。

もう、越冬から醒めたキベリタテハ [Nymphalis antiopa] が飛んでいます。ビロードのような美しい羽の蝶を目で追っていくと何か黒い物の上に止まり……って、えっ！この黒い物体！ツキノワグマの糞じゃないですか。

そんな季節、ブナの芽吹きが始まった森の中から綺麗な複雑な囀りが聞こえてきました。

双眼鏡で声の主を探していくと、いました。やっぱりコサメビタキ [Muscicapa dauurica] でした。

どうも、この囀りは苦手です。覚えられなくていつも悩みます。複雑な節回しで美しいのですが、これといったインパクトがないんですよね。

一年経って再び春が来た頃には忘れてしまう……ごめんなさい。

だいたい4月末から5月始め頃、鹿角市花輪の我が家の傍の谷戸に行くと、本年初見で出会うことになります。

それから、湯瀬溪谷など、2～3週後に八幡平3～5合目付近と上がっていきます。

最初はひっそりと目立たないのですが、ブナやミズナラの広葉樹林に一斉に夏鳥の囀りが始まる頃はコサメビタキも混じって、よく目に、耳にします。

日本で見られるサメビタキ属 [Muscicapa] は3種。コサメビタキとサメビタキ [Muscicapa sibirica] が夏鳥、エゾビタキ [Muscicapa griseisticta] が旅鳥で

す。なぜか「エゾ」ビタキと名付けられているので、北海道や東北で繁殖すると思っている人がいますが、エゾビタキは東南アジアから西日本や中部・関東地方を経由して大陸北部へ渡っていくので、北日本の内陸ではあまり見られません。

鹿角ではサメビタキ属の代表はコサメビタキです。

ほぼ雌雄同色で、雄雌の羽衣の違いはほとんどありません。

そして、キビタキ [*Ficedula narcissina*] の雌によく似ています。細部を見れば見るほど区別がしにくくなるのが、困ります。

じつは、鳥見を始めた頃、私は、キビタキ雌とコサメビタキの見分けにまったく自信がありませんでした。たしかに、目の前の白斑とか識別点はいろいろありますが、そんな部分がいつもはっきり見えるわけじゃないし。

明らかにコサメビタキと分かる個体もあります。でもキビタキのようにも見えコサメビタキのようにも見え……というのによく出くわして悩み狂うのです。で、悩んだ結果、どうもキビタキ雌らしい、という結論に。

ここで、はたと気がつきました。そうです、悩むようなのは全部キビタキなんです。コサメビタキは、見た瞬間に「まさにコサメだあ！」と直感で分かるのです。

以前、チュウサギとダイサギの見分け方で迷った時のことを思い出しました。チュウサギは見た瞬間に全体のバランスでチュウサギと分かる。迷うようなのはダイサギで間違いない。

コサメビタキも同じ要領で識別できるじゃないですか？ 実にアンバランスに大きな頭！ 大きな目玉！ 持て余すように長い第1風切！ それがコサメです。考えすぎて細部を見ちゃいけない。

そのツボが分かってから、やっと迷わなくなりました。

地味な色ですが、大きな頭とクリクリお目々が不思議と愛らしいコサメです。

ヒタキの特徴で、短い足で枝に縦に停まります。そして。飛び出してまた同じ枝に戻る習性がありますから、一度見つけたらゆっくり楽しませてくれる嬉しい鳥です。

18. エゾムシクイ [Phylloscopus borealoides]



春の声

焼山火口から雪解け水を集めて流れ落ちる中の沢の激しい瀬音が聞こえています。曾利滝へ下る道はまだ雪の下です。慎重に歩きましょう。

雪の解け始めた斜面ではイワナシが咲いています。

この植物相は特徴的です。谷地沢と中の沢に挟まれた細い尾根筋の一系列だけがゴヨウマツやコメツガの針葉樹です。そして、両側の斜面はブナやミズナラの広葉樹です。

痩せた尾根筋だけ荒地に強い針葉樹で斜面は広葉樹という分布は珍しいものではありませんが、車を降りてすぐそういう尾根を歩ける場所は、そう多くはありません。

頭上のゴヨウマツからヒガラ [Parus ater] の囀りシャワーが降り注いできます。

対岸から、遠くビンズイ [Anthus hodgsoni] の囀りが聞こえてきます。

そして、両側の斜面の広葉樹では、ちょうど到着したエゾムシクイ [Phylloscopus borealoides] が飛び回っていました。

エゾムシクイは囀りの時は樹林の高層、梢付近にいます。採餌は下層、藪を好みます。広葉樹の樹冠と林床の両方を一度に見渡せるこの急斜面は観察に好都合なのです。

日本産Phylloscopus [メボソムシクイ属] 3種のうち、エゾムシクイがもつとも目にしにくい、と言うバードウォッチャーが多いです。

里山のセンダイムシクイ [Phylloscopus coronatus]、高山のメボソムシクイ [Phylloscopus borealis] に比べて、山の中腹・深い広葉樹林帯で繁殖するエ

ゾムシクイは、たしかに見えづらい鳥です。

目にはしても写真がまた撮りにくいのです。上の写真は春の渡りで我が家の傍に立ち寄ってくれたときの1枚です。ほんとうは山中で撮りたいのですけれどね。

花輪盆地には、里の雪が消えて、皮投岳の山肌に黒い部分が増えてくる頃、センダイムシクイの後を追うようにやってきます。

そのまま、里に居着くセンダイムシクイとは違い、1週間ほどで里から姿を消して、山の広葉樹林帯に登っていきます。

ムシクイ3種の中では、いちばん小型で華奢な印象を受ける外観です。

メボソムシクイに比べて、少し黄色味が強いこと、背中がほんの少し暗色なこと、眉斑はメボソムシクイよりも鼻先近くまで伸びていること、などなど、傾向的な識別点がありますが、かなり微妙な違いで個体差に埋もれてしまい、識別には悩まされることも多いです。

鳴いてくれば、地鳴きでも一発で分かって簡単なのですが。

「ピッ」と言う甲高い金属性の地鳴きをします。囀りは「ツーキーヒー(月 日)」と聞きなしされる3拍子の歌声です。

繰り返して聞いているうち、ワルツのようなリズムに乗って聞こえてきます。

ブナの芽吹きの子節、この声が聞こえるとワクワクしてきます。

子節はまさに春です。「春の声」ヨハン・シュトラウスです。

[[display](#)]

revision 1.6 2014/04/15 (2014/04/11初稿)

written by © 2014,OOSATO,Kazzrou : kazz_atmark_kk.iij4u.or.jp